

聲明書

九州民憲黨の所謂『内紛』について

全日本の無産者諸君

日本の政治的並に經濟的事情は全日本の無産者をして、急速なる無産階級的政黨の組織を促進するが如き機運の下にある。

吾等が茲に全九州の同僚と語り、九州の特殊の事情を考慮して九州民憲黨を組織するや各地よりの入黨者相つぎ、殊に去る四月八幡市々會議員の改選にあつては黨員四名を立候補せしめて政戦に参加し、四名とも高点をもつて當選したのであつた。次いで六月八幡市に九州民憲黨の大會を開き、堂々の陣容を張つて既政黨を戰慄せしめ、無産階級をして狂喜讃仰の的たらしめた更に吾等は来る八月一日を期して機關紙『民憲』を發行すべく既に一万部の印刷を終へて配本の手續中であり八月上旬には麻生久、棚橋小虎、山名義鶴の諸君の來援を挨つて九州各地に大遊説を試むべく、かくの如くして吾等は極力黨勢の擴張に力を盡すと共に、又内には鋭意組織の完成に努めつゝあることは既に諸君の熟知せらるゝが如くである。

全日本の無産者諸君

吾等は無産階級の立場にあつて政黨を組織し、所謂『全世界のプロレタリア團結せよ』又『政治は民衆のものなり』なる標語の下に敢てブルジョアの牙城に肉薄せんとするものである。故に吾等と志を同ふする千葉、關西の民政黨、足尾の公民黨等とは常に友黨的關係を結んで來たばかりでなく、曩には吾等と四黨聯盟して吾等の態度を聲明したるが如き、或は日本農民組合政治部、水平社、各種の無産團體及び政治研究會等と語つて全國的なる一大無産政黨の組織に努力しつゝあることなどは誠に諸君の期待に背かない所以であると考へる。

全日本の無産者諸君

然るに何事ぞ、去る七月十七日吾が黨の中央委員にして事實上の吾が民憲黨の中堅をなせる淺原健三君が尼崎市民政黨の立憲式に列席して不在なるに乘じ巧名なる陰謀をめぐらして同君を除名せんとしたものである。即ち淺原健三君が旅行不在中なる七月二十二日の

中央委員會に大田黒、吉村の兩名より『淺原健三君除名案』として提案せられたものがそれである。けれども中央委員會はその理由が無根の事實であるか、或は甚しく事實を誇張したものであると考へたが故に、慎重に審議すべく採決を保留することに決した

超えて二十四日累ねて中央委員會を開き、除名案を審議した結果、偶々反響したる、淺原君について、念のため懇談的に問ひたすべく六名の委員を選出して散會したのであつた。よつて六名の委員は翌二十五日の夜淺原君を自宅に訪ふて、會見を遂げたが、所謂除名案なるもの、提案理由は極めて薄弱なるのみならず、寧ろ無根の事實であり或は甚しく事實を誇張したものであることが分明するに至つた。且つ前記大田黒君は去る二十二日及び二十四日の中央委員會の經過を殊更に吾等を擾亂せんとするが如き態度口吻をもつて新聞記者に語りたるが如きはこゝに列記した中央委員會の經過と、各新聞紙に報せられたる記事とを併せ讀むもの、何人も首肯する所であらう。

故に本日更に中央委員會を開き、所謂『淺原君除名案』なるものを三度累ねて審議せんとしたのであつたが、提案者の一人たる吉村眞澄君はこれが撤回を聲明し次いで満場一致該案を審議するの必要なものと認めて議案としての採決を斥けらるゝに至つたのである

全日本の無産者諸君

以上述べたる所によつて、吾が民憲黨の態度を理解せらるゝと共に、諸君が此度の所謂内紛の真相を諒解せられること、信する。

惟ふに今は無産階級に黎明が近づきつゝある時である。吾等は壓迫と迫害の曠野に曝されながらも萬難を排し、一致協力、團結して無産階級解放運動の爲に奮進すべく、斷じて一二野望家の爲に吾等の陣容を亂されてはならない。故に吾等は本日の中央委員會に於て斷呼として前記大田黒君の除名を決議したことをこゝに發表すると共に、吾が九州民憲黨の中堅たる淺原健三君を信任して益々吾黨の發展に努力することを聲明する。

大正十四年七月二十六日

九州民憲黨中央委員會